紀　　要

第 5 号

日　　次

序
1. 滋賀県出土の埴輪資料集（その２）……（稲垣 正宏・平井 佳子）
2. 粟津湖底遺跡の地形環境 ……（伊庭　功）
3. 京のキリシタン
　—京都市内出土のキリシタン墓碑と
　キリスト教徒の動向に関する覚書— ……（上垣 幸徳）
4. 坂田酒人氏について
　—平城京「二条大路木簡」の発見と関連して— ……（大橋 信弥）
5. 人はそれでもタンパクシツを欲した
　—土錘出土量から見た近江における網漁の展開・特に中世—
　……（大沼 芳幸）
6. 近江国坂田荘の開発（上）
　—長浜市大東遺跡を中心として— ……（北村 圭弘）
7. 中世墓地にみる集団構造
　—その基礎的操作（1）— ……（瀬口 眞司）
8. 滋賀県内出土漆製品集成 —前編— ……（中川 正人）
9. 草津市中畑遺跡出土の平安時代犂について ……（平井 美典）

1992. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

8．滋賀県内出土漆製品集成 ── 前編 ──

中 川 正 人

1．はじめに

本稿は、滋賀県内においても漆製品の出土例が増加するなか、現時点での漆製品の出土状況を把握し、その形態や構造の概略をまとめるのが目的である。ここで集成する漆製品は前編とし、縄文時代から古墳時代までのものに限った。その種類を大きく装身具、武具、容器、その他に分類し、各遺物の形態、材質、構造について観察しその特徴を概説する。また、実測図あるいは概略図と写真については可能な限り収集し、形態や構造についての説明を補った。

木製品や土器のなかに、赤色の塗彩がみられるものが数多く出土しているが、漆独特のツヤや明らかに樹脂が見られない資料は除外した。本文中赤漆塗りと表現したものついては赤色の顔料が朱（硫化水銀）がベンガラ（酸化鉄）かの分析を実施していない。今後、分析機器を用いた精密な研究、他の資料との比較研究などへの基本的資料としたい。

2．装 身 具

人が身を飾りはじめたのはいつの頃からだろうか。装身具は石、ガラス、金属はもとより、水や竹、貝や骨などの動植物から造られた有機質の素材など多種多様である。有機質の装身具は一般に考古遺物として残りにくい。装身具の材料として、石製品、土製品が多いのは、やはり材質の違いからであろうか。装身具の種類は、腕輪、櫛、耳栓、首飾りなどで、それぞれ時代に合った流行があったようだ。また装身具に色彩を施すことで装飾性を高めた。古代においても装身具は丈夫で美しい形が好まれた。

朱漆塗り腕輪

滋賀里遺跡から腕輪と考えられる朱漆塗りの輪状品が出土している。この滋賀里例（F－1)(P－1）の腕輪は、断面形状が長径7㎜、短径5㎜の楕円形で、全体を復元した腕輪の直径は約85㎝である。木質は自然乾燥のため収縮し内部は空洞化しているが、漆膜は比較的よく残っている。腕輪としてはやや細い造りで、ところどころ朱塗りが剥げ下地が見えている。

赤塗り環状土製品

縄文時代の環状土製品は、滋賀里遺跡から1例（F－2）・（P－2)、北萱遺跡から2例（F－3、4）・（P－3、4、5）西海道北仰遺跡から1例（F－5）・（P－6）出土している。これらの土製品は、西街道北仰遺跡の例を除いていずれもヒノキや杉または桜の樹皮を環状に束ねたものを芯として、粘土を巻いて制作したようである。同心円状に剥離しやすく、断面にはそれぞれ粘土の粒度や色合の違いから層が観察できる。層と層の間に赤の顔料が残っているものもある。

これらの土製品は、内部の骨材の樹皮が残存しているものがあることから焼成品とは考えられない。粘土に漆を混ぜ合わせて固めるいわゆる練り物であろうか。北萱遺跡の例は内部に樹皮が良く

残っているし、滋賀里の例は樹皮の痕跡が明瞭である。漆の塗膜について、北萱遺跡の2例は非常に漆膜が厚く緻密である。滋賀里、西海道北仰遺跡の例は赤塗りであるが、漆特有の光沢が失われており漆塗りではない資料として扱うのが正確かも知れないが一応ここにあげた。

この土製品の用途としては、まず腕輪が考えられるが、全体を復元した場合、直径が約12㎝、重量が約200ｇと大変重く日常の生活には不便であろう。ただし現在のアクセサリーの感覚でみた場合である。別の用途として考えるならば、この環状品は土器、木器などの底部が丸い鉢などを載せる道具であったことも考えられるが、精緻な漆膜の表面には、生活用具としての使用にさいしての大きな傷などが見られない。検討課題である。

赤漆塗り結歯竪櫛

縄文時代の結歯竪櫛の構造は、基本的に櫛歯となる木質を植物繊維の紐で組み、空隙を塑形材でうめて下地を調整し表面を彩色している。その漆塗り膜は厚く堅ろうである。歯と歯の間を埋める塑形材については、伝統的な漆芸技法では、刻苧と称する漆と木粉や地の粉を練り合わせた材料を使用するが、縄文時代の漆製品はどのような素材を使ったのであろうか。

滋賀里遺跡からは籃胎漆器をはじめ数例の漆製品が出土している。今回この出土漆製品の実態調査において、滋賀里遺跡の資料を精査したさいに、新たに竪櫛になるのではないかと思われる漆製品の断片2例を加えることになった。滋賀里例（Ｆ－６）・（Ｐ－７）については歯が３本程度残存している。滋賀里例（Ｆ－７）・（Ｐ－８）については断面が三角形で、内部に偏平な材がのぞいている。また、滋賀里例（Ｆ－８）・（Ｐ－９）については厚みが薄い。この２例については櫛と断定することはできないものの、カンザシなど装身具の一部であることも考えられる。

粟津湖底遺跡については、平成２年度から３年度にかけて大規模な貝塚の発掘調査が実施されたが、この調査で縄文時代の結歯竪櫛が３例出土した。粟津湖底遺跡例（Ｐ－10）は頭部が逆Ｕ字形で櫛歯は17本を綴じ合わせたもの、粟津湖底遺跡例（Ｐ－11）では、約４㎜四方の角材の櫛歯を塑形材で固めたもので、いずれも赤色顔料を混ぜた漆で表面を仕上げている。

松原内湖遺跡出土の結歯竪櫛（Ｐ－12）については、断面が直径約４～５㎜のほぼ円形の材を櫛歯とし、それぞれ紐で結束し隙間を塑形材でうめて、頭部の形状を台形にまとめ上げ表面に赤漆を塗布している。復元した頭部の幅は８㎝ぐらいであろう。

飾り櫛

県内での弥生時代の確実な装身具に関する漆製品の出土例はないようである。服部遺跡出土の櫛（Ｆ－10）・（Ｐ－15）については、櫛頭部の装飾部分に赤の顔料が残っているが、この彩色が漆をもって施されたかは確認できない。膠など他の膠着材で着彩された可能性がある。ここでは装身具の関連出土例として紹介した。

黒漆塗り竪櫛

古墳時代の装身具については、古墳主体部内外から多種多彩な出土品が見られる。そうした副葬品のなかに黒漆塗りのＵ字形の竪櫛が多く存在する。また、近年平地の集落遺跡からも出土することから、祭祠的な用途として使用され埋没したと考えられる報告例がある。この黒漆塗りのＵ字形櫛の構造は、竹と思われる素材を10数本程度束ね、頭部を糸でかがり黒漆で固めている。このタイ

プの櫛は全国的に数多く出土し、その製作方法もほぼ同じであることから、須恵器などの土器の生産と流通にみられる様に、漆製品においても製作者の集団の存在と流通について、この時代すでに確立していたのではと考えられる。

未盗掘の前期古墳として知られる雪野山古墳からは、黒漆塗り竪櫛が10数本まとまって出土している。横江遺跡では祭祠土壙からの一括で3本（F－11、12）・（P－16）、吉見西遺跡（P－17）、石田三宅遺跡（F－13）、服部遺跡、新開1号墳、下味古墳（F－14）、冨波遺跡（F－15）・（P－18）などからの出土例の報告がある。

赤漆塗り耳栓

縄文時代の彩色のある耳栓については県下で3例が知られている。穴太遺跡例では鼓形の耳栓の中央部のくぼみに赤色の彩色が残っている。ただし赤を漆に混ぜ合わせて塗ったものであるかは風化が著しく確定できない。粟津湖底遺跡（P－13）と松原内湖遺跡（F－9）・（P－14）からは中央部に穴のある耳栓が出土しており、表面が滑らかで光沢を残す赤塗りの漆膜が見られる。

黒漆塗り土玉

古墳からの装身具には首飾りの材料として、玉、ガラス、金属が一般的であるが、これらの材質に加え、粘土を丸め表面に漆を塗って土玉とした例がある。これら多種類の材質を連結することによって個性ある装飾品が生まれる。漆黒に塗られた土玉は他の材質に比べていわば地味で、他の主張する色とのコントラストが鮮やかである。古代においても色の組合せを楽しんだのであろうか。三大寺遺跡出土の黒漆塗り土玉は、65個が連なった状態で出土している。土玉自体は焼成されているが、やや焼きが甘いようで硬度がなく割れやすい。

3．狩漁具・武器・武具

食料を得るための狩漁の道具は、それを製作するための素材がよく吟味され、材料を活かした形、材料の能力を発揮できる道具づくりの伝統が古くから確立されていたようだ。弓の材料は、曲げに強く弾性のあるカヤの木がよく用いられる。また、狩漁具という実用の道具だからこそ、耐久力のある美しい道具として大切にされたに違いない。そうした道具に漆塗りの弓がある。

また、弥生時代のころからの武器の登場は、実戦用であるからは重要な問題であるが、さらに装飾を加えることによって権威を高め、相手を威嚇し、古墳時代に至ってはさらに象徴的な武具の登場につながっていく。

黒漆塗り弓

滋賀里遺跡からは黒漆塗り弓がいずれも破片であるが2例（F－16）・（P－19）出土している。全体に黒漆を塗り、糸巻の部分に赤漆を塗り装飾している。松原内湖遺跡例（F－17）・（P－20）は、県内では初めて完形で出土したもので、上下の弓弭の部分を除いて全面に黒漆を塗り、4カ所に糸巻を施し、この部分を赤漆で塗りわけている。

小津浜遺跡例（F－18）は、両端が欠損し廃棄したさいの焼け焦げ跡が残る。直径が2㎝程度の細い弓材であり、糸巻と糸巻の間隔が4～7㎝と狭いことから小型の弓と考えられる。大中の湖南遺跡からは弥生時代のものであろうか長さが164.5㎝の長弓と82.5㎝の短弓が出土している。長弓

は4カ所に桜か樺の樹皮を巻いており、樹皮と弓身の接着に漆を使用している可能性がある。弓の内側は弾力を調節するための樋と呼ばれる溝を深く彫り込んでいる。また、短弓のほうは全面に黒漆を塗っている。

入江内湖遺跡例（F－19）は糸巻あるいは樺巻などが見られない。守山市下之郷遺跡からは弥生時代の黒漆塗り弓が出土しているが、現在保存処理中ということで実見していない。

靫・背負い板

雪野山古墳の出土遺物については、現在整理作業中であるが漆製品が豊富である。この雪野山古墳からは、矢を入れる道具である靫が3例ほど出土している。靫の材料は革の断面を方形ないし楕円の袋状にし、編物でかぶせるように外側を紐で組み上げ全体を黒漆で固めている。靫下方より直弧文の漆膜が同時に出土しており、靫本体との関連が興味深い。また、同古墳の木棺外から靫の背負い板と想定できる漆膜も出土している。

黒漆塗り木製短甲

黒漆塗りの木製短甲は、松原内湖遺跡から出土している（F－20）・（P－21）。後胴と考えられる部分で、鉄製の短甲の特徴を模倣的に表現した革とじが見られる。表に黒漆を塗っている。漆膜は薄いがしっかりと木質になじんでいる。漆が染み込んで残った革紐がところどころ観察できる。

漆塗り盾

昭和34年、栗東町新開1号墳から漆塗り革製盾が漆膜のみの状態で3例（F－21）出土し、当時石膏で漆膜を固定し取り上げられ保管されている。裏面が表になっている現状から、今後保存処理を含め反転するなどして文様の観察が必要である。また、同遺跡の発掘調査概要には材質についての記述が見あたらないが、この盾の素地の材質が革か木製についても再考する必要がある。

漆塗り木製刀装具

漆を使用した刀装具の出土例は、守山市服部遺跡出土例1例と同市下長遺跡からの木製の把頭2例がある。服部遺跡からの1例は、直弧文のある鹿角製の装具の系統で、全体が黒漆塗りで側面の直弧文は赤漆が塗られている。同様の直弧文のある柄頭と装飾のない簡素な黒漆塗り把頭が下長遺跡から出土しているが、2例とも現在保存処理中であるため実見していない。

斗西遺跡からは木製柄頭とされている環頭形木製品が出土している（F－22）・（P－22）。形状が鉄製環頭太刀に似ているが、ホゾ穴がなく着柄の仕組みに疑問が残る。同様の木製品が奈良県戸石・辰巳前遺跡から出土しているが、概要報告によれば漆塗りの記述はない。また、実見していないが同遺跡から古墳時代とみられる黒漆塗りの鞍も出土している。

4．容　　器

生活用具として、日常水を汲み、食物を盛りつけ、貯蔵した器の歴史は古い。木を彫り込んで薄く削り漆を塗った椀の歴史も大変古い。竹や蔓草などの植物繊維を編んで作った篭に漆を塗り容器とした漆器は籃胎漆器と呼ばれる。この漆器は特に軽く丈夫であることから生活用具として重宝されたであろう。籃胎漆器にみられる高度な漆工技術ははるか縄文時代にまで溯ることは特筆に値する。

籃胎漆器

滋賀里遺跡出土の籃胎漆器（P－23）は、残念ながら破片での出土のため全体の器形を復元することができない。これらの破片の裏側には、竹あるいは蔓の繊維を編んだ痕跡が明瞭に残されている。塑形材の材料は、実体顕微鏡下での観察では微細な土の粒子が見られることから、漆にとの粉や火山灰などの微粉末を混ぜ合わせたものではないかと考えられる。

漆塗り容器

松原内湖遺跡出土の赤漆塗り浅鉢（P－24）は破片であるが、復元すると直径が30cm程度となる。口縁部が摩滅し一部素地が露出しており、当時木ノ実や乾物などを盛りつけた日常雑器として使用されたと思われる。

弥生時代の多数の木製品が出土していて知られる大中の湖南遺跡からは、漆塗りの大鉢の例（P－25）がある。器の外面には流水紋とボタン状の突起を配置し赤漆を塗っている。また内面は黒漆を塗っている。同遺跡から木製高杯も出土しており、当時使用したさい壊れたのであろうか、脚部に黒漆による補修跡が見られる。修理しながら大切に使った証拠である。

奥松戸遺跡例（F－23）の漆塗り高杯とみられる破片は、全体に摩滅が著しく全体の形の復元は困難であるが、透かしのある脚部の部材かと思われる。赤漆と黒漆が塗られている。入江内湖遺跡出土の高杯（F－24）・（P－26）は、杯の部分の復元径が40cm程もある大きなものである。高杯の内面に赤漆塗りの痕跡があり、外側は黒漆で塗られていたようだ。また木地はロクロによる仕上げと思われる突帯が内外面にある。当時の木工品の優品である。

雪野山古墳からの漆膜のなかには、直弧文や鋸歯文のある断片が多数存在していることは前にもふれたが、そのなかで文様の組合せから合子とみられる漆膜がある。合子はこれまで石製のものが通例であるが、石製の合子が木製のものを模造している可能性も考えられる。入江内湖遺跡からは木槽に漆を塗った黒漆塗り方盤の例（F－25）がある。

5．その他

その他の漆製品の例として、古墳時代の儀式のさいに用いられたと考えられる蓋の笠骨が県下から3例出土している。蓋は従来より蓋形埴輪で知られていたものが、木製品で実際に作られていたことを示す資料として注目を浴びた。自然の木の枝を利用し笠の骨とし、軸木を受ける工夫がなされている。

松原内湖遺跡例（P－27）は、4本構成の腕木のうち1本が先端まで残っている。軸受けには糸が丁寧に巻かれ黒漆が塗られている。出町遺跡の例（F－26）も四方に張り出す形態で、4本の腕木構成で、うち3本が残っている。腕木の先端は、松原内湖例と同じように漆が塗られていないか剥げた部分があり、別材と組み合わされていた痕跡がある。樹種はカヤである。また、石田三宅遺跡例は、腕木を2本残すのみであるが、復元すれば5本の腕木であったようだ。軸受け部分に糸巻きはなく、樹種は松と報告されている。このような蓋の出土例は関東地方も含め、全国で10例前後報告されており、儀式の道具としてある程度全国的に広がっていたことも考えられる。

6．今後の研究課題

滋賀県では湖底遺跡などの低湿地遺跡を中心に、とくに縄文時代の漆製品がある程度まとまって出土していることは遺跡の立地と埋蔵環境によるものである。材料として漆をみた場合、漆の木からの採取から精製にいたる取り扱いが難しいといわれている。各時代おける漆製品の生産と流通の問題はもとより、日常生活のなかで漆製品がどの程度普及し、どのような使い方をされていたか、残された課題は多い。

冒頭に述べたように、本稿では単に滋賀県内における漆製品の出土例の把握と観察にとどめたが、各資料における材質と漆塗りの技法の解明について、今後、漆膜の断面観察、材質分析、顔料分析などを進めながら、東日本にみられる漆製品との比較研究などの研究も必要となってくるであろう。また、縄文時代から古墳時代にかけての漆製品の出土例として前編をまとめたが、奈良時代以降の漆製品も現在相当数にのぼっている。とくに漆塗り椀は、木地と下地それに椀を飾る文様など多方面の研究課題が残されている。引続いて別の機会に集成にあたりたい。今回とくに縄文時代の漆製品について貴重な御教示をいただいた奈良国立文化財研究所工楽善通氏、また資料の問い合わせについて、各市町村担当者の方々に深く感謝する次第である。

資料文献（＊漆製品出土一覧の文献番号に符号）

(1) 湖西線関係遺跡発掘調査報告書　1973

(2) 今津町文化財調査報告書第７集　1987

(3) 滋賀埋文ニュース第134号　1991

(4) 滋賀埋文ニュース第92号　1987

(5) 滋賀文化財だよりNo.151　1990

(6) 服部遺跡発掘調査概報　1980

(7) 雪野山古墳第1次発掘調査概要　1990

(8) 横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ　1986

(9) 石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅱ　1991

(10) 滋賀県史跡調査報告12　1961

(11) 三大寺遺跡群発掘調査報告書　1984

(12) 滋賀埋文ニュース第138号　1991

(13) 入江内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告書　1988

(14) 滋賀考古学論集第4集　1988

(15) 能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集　1988

(16) 粟津貝塚湖底遺跡　1984

(17) 大中の湖南遺跡　滋賀民俗学会　1968

(18) 一般国道８号（長浜バイパス）関連遺跡発掘調査報Ⅵ　1989

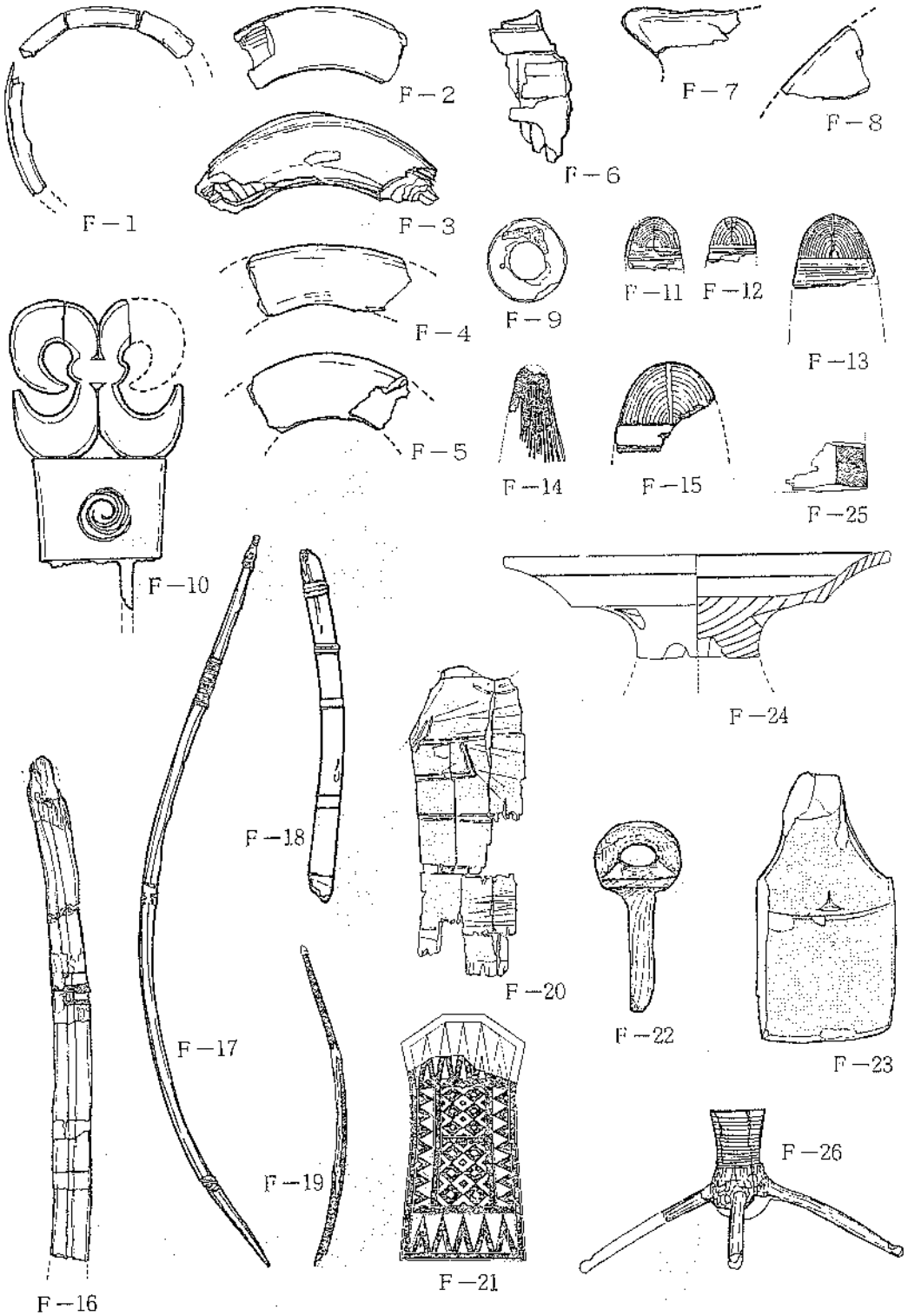
(19) 播磨考古学論集　1990

(20) 出町遺跡発掘調査報告書　1984

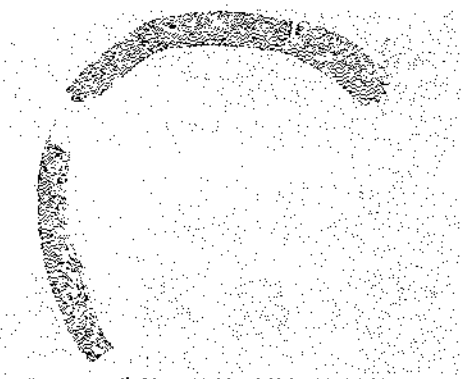
(21) 石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅱ　1991

滋賀県内出土漆製品一覧［前編］

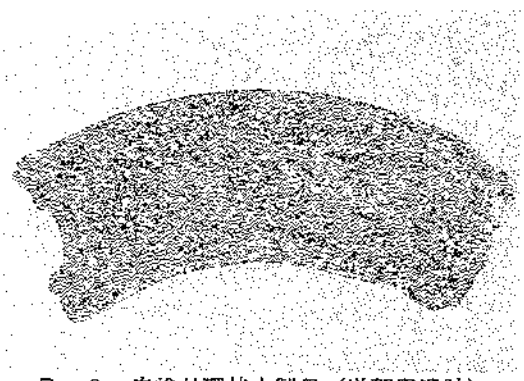
漆器の種類		遺跡名	所在地	数	遺構	時代	図番号	写真番号	文献番号
装飾具	朱塗り腕輪	滋賀里遺跡	大津市滋賀里町	1	包含層	縄文	F−1	P−1	(1)
	朱塗り環状土製品	滋賀里遺跡	大津市滋賀里町	1	包含層	縄文	F−2	P−2	(1)
		北萱遺跡	草津市御倉町	2	包含層	縄文	F−3・4	P−3・4・5	
		西海道北仰遺跡	今津町北仰	1	包含層	縄文	F−5	P−6	(2)
	結歯竪櫛	滋賀里遺跡	大津市滋賀里町	3	包含層	縄文	F−6・7・8	P−7・8・9	(1)
		粟津湖底遺跡	大津市晴嵐町地先	3	貝塚	縄文		P−10・11	(3)
		松原内湖遺跡	彦根市松原町	1	包含層	縄文		P−12	(4)
	朱漆塗り耳栓	穴太遺跡	大津市穴太町	1	包含層	縄文			
		粟津湖底遺跡	大津市晴嵐町地先	1	貝塚	縄文		P−13	
		松原内湖遺跡	彦根市松原町	1	包含層	縄文	F−9	P−14	(5)
	赤塗り櫛	服部遺跡	守山市服部町	1	包含層	弥生	F−10	P−15	(6)
	黒漆塗り竪櫛	雪野山古墳	八日市市上羽田町	16	石室内	古墳			(7)
		横江遺跡	守山市横江町	3	土壙	古墳	F−11・12	P−16	(8)
		吉見西遺跡	守山市守山町	1	土壙	古墳		P−17	
		石田三宅遺跡	守山市石田町・三宅町	1	溝	古墳	F−13		(9)
		服部遺跡	守山市服部町	1	包含層	古墳			(6)
		新開1号墳	栗東町安養寺	2	主体部	古墳			(10)
		下味古墳	栗東町川辺	1	棺内	古墳	F−14		(10)
		冨波遺跡	野洲町冨波甲・乙	1	包含層	古墳	F−15	P−18	
	黒漆塗り土玉	三大寺遺跡	米原町枝折	65	古墳石室	古墳			(11)
狩猟具・武器・武具	黒漆塗り弓	滋賀里遺跡	大津市滋賀里町	2	包含層	縄文	F−16	P−19	(1)
		松原内湖遺跡	彦根市松原町	1	包含層	縄文	F−17	P−20	(4)
		小津浜遺跡	守山市山賀町・杉江町	1	包含層	縄文	F−18		
		下之郷遺跡	守山市下之郷町	1	溝	弥生			
		大中の湖南遺跡	安土町下豊浦	2	包含層	弥生			(17)
		入江内湖遺跡	米原町下多良	1	包含層	古墳	F−19		(13)
	靫	雪野山古墳	八日市市上羽田町	3	石室内	古墳			(7)
	背負い板	雪野山古墳	八日市市上羽田町	1	石室内	古墳			(7)
	黒漆塗り短甲	松原内湖遺跡	彦根市松原町	1	包含層	古墳	F−20	P−21	(14)
	漆塗り革製盾	新開1号墳	栗東町安養寺	3	主体部	古墳	F−21		(10)
	黒漆塗り把頭	服部遺跡	守山市服部町	1	包含層	古墳			
		下長遺跡	守山市古高町	2	沼跡	古墳			
	瑞頭形木製品	斗西遺跡	能登川町神郷	1	河川跡	古墳	F−22	P−22	(15)
	黒漆塗り鞍	斗西遺跡	能登川町神郷	1	河川跡	古墳			
容器	藍胎漆器	滋賀里遺跡	大津市滋賀里町	1	包含層	縄文		P−23	(1)
	黒漆塗り椀	滋賀里遺跡	大津市滋賀里町	1	包含層	縄文			(1)
	漆塗り土器片	粟津湖底遺跡	大津市晴嵐町地先	8	貝塚	縄文			(16)
	赤漆塗り浅鉢	松原内湖遺跡	彦根市松原町	1	包含層	縄文		P−24	
	漆塗り大鉢	大中の湖南遺跡	安土町下豊浦	1	包含層	弥生		P−25	(17)
	木製高杯	大中の湖南遺跡	安土町下豊浦	1	包含層	弥生			(17)
	黒漆塗り高杯	奥松戸遺跡	近江町長沢	1	溝	弥生	F−23		(18)
	合子	雪野山古墳	八日市市上羽田町	1	石室内	古墳			(7)
	黒漆塗り高杯	入江内湖遺跡	米原町下多良	1	包含層	古墳	F−24	P−26	(13)
	黒漆塗り方盤	入江内湖遺跡	米原町下多良	1	包含層	古墳	F−25		(13)
その他	黒漆塗り蓋笠骨	松原内湖遺跡	彦根市松原町	1	包含層	古墳		P−27	(19)
		出町遺跡	近江八幡市出町	1	河川跡	弥生	F−26		(20)
		石田三宅遺跡	守山市石田町・三宅町	1	溝	古墳			(21)


F－1
F－2
F－3
F－4
F－5
F－6
F－7
F－8
F－9
F－10
F－11
F－12
F－13
F－14
F－15
F－16
F－17
F－18
F－19
F－20
F－21
F－22
F－23
F－24
F－25
F－26

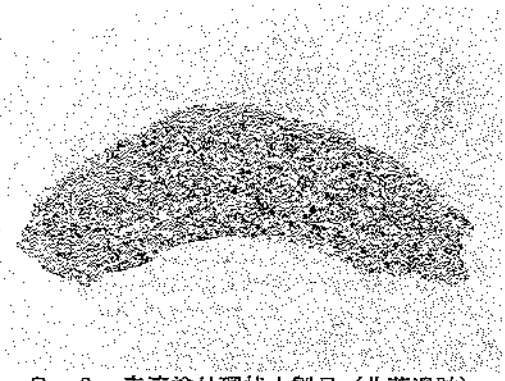
県内出土漆製品集成図



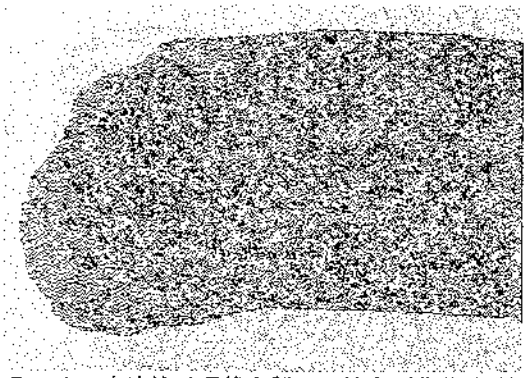
P－1　朱塗り腕輪（滋賀里遺跡）



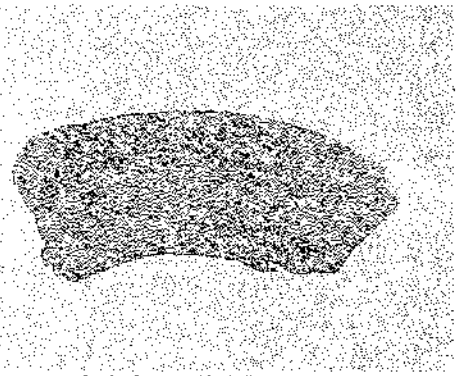
P－2　赤塗り環状土製品（滋賀里遺跡）



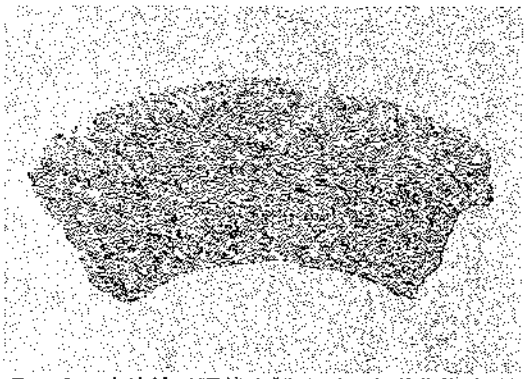
P－3　赤漆塗り環状土製品（北萱遺跡）



P－4　赤漆塗り環状土製品・拡大（北萱遺跡）

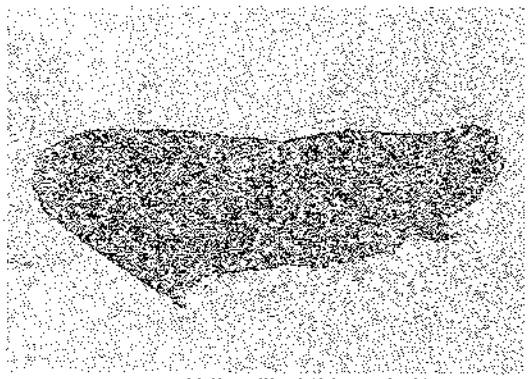


P－5　赤漆塗り環状土製品（北萱遺跡）

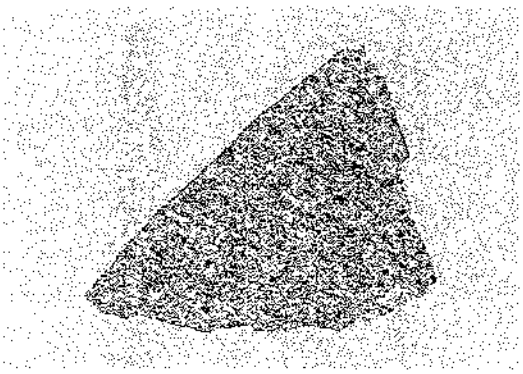


P－6　赤漆塗り環状土製品（西海道北仰遺跡）

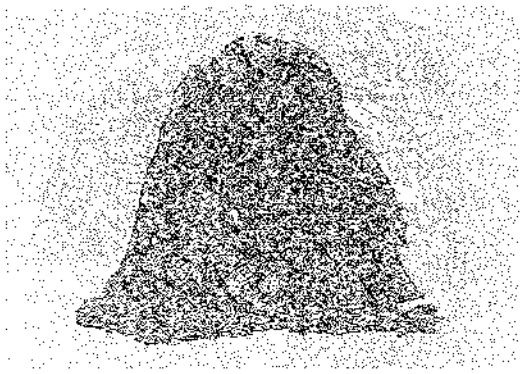
P－7　結歯竪櫛（滋賀里遺跡）



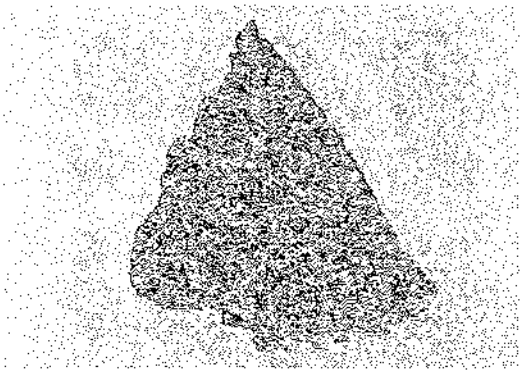
P－8　結歯竪櫛（滋賀里遺跡）



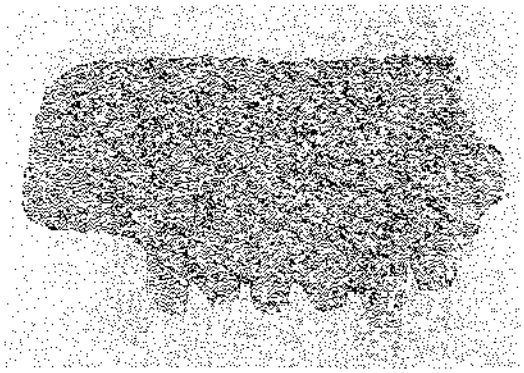
P－9　結歯竪櫛（滋賀里遺跡）



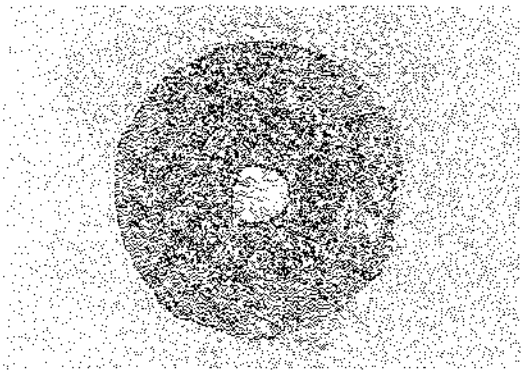
P－10　結歯竪櫛（粟津湖底遺跡）



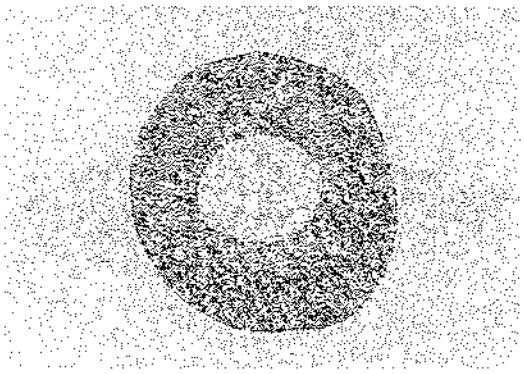
P－11　結歯竪櫛（粟津湖底遺跡）



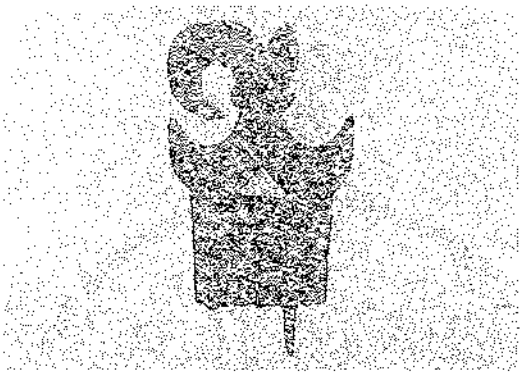
P－12　結歯竪櫛（松原内湖遺跡）



P－13　赤漆塗り耳栓（粟津湖底遺跡）

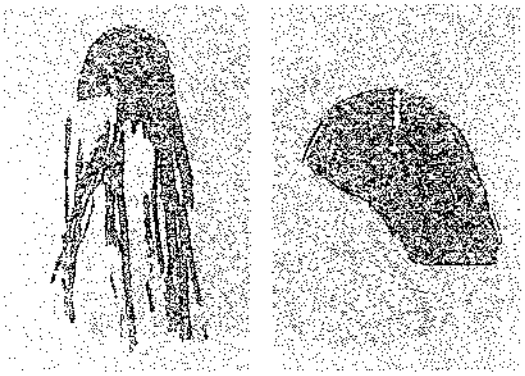


P－14　赤漆塗り耳栓（松原内湖遺跡）

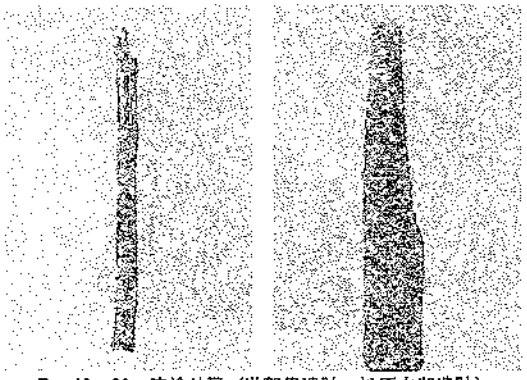


P－15　赤漆塗り櫛（服部遺跡）

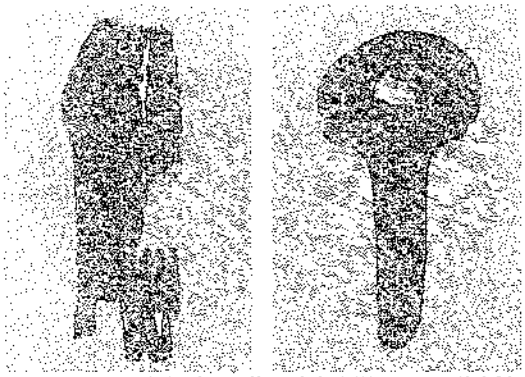
P－16　黒漆塗り竪櫛（横江遺跡）



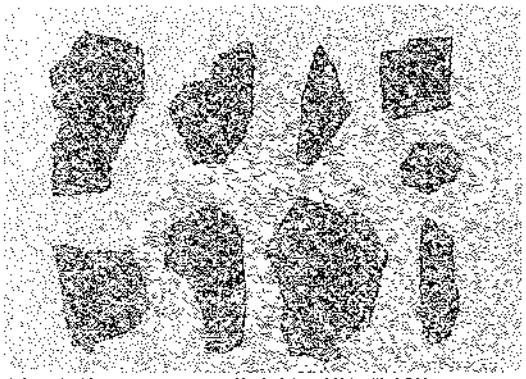
P－17・18　黒漆塗り竪櫛（吉見西遺跡、冨波遺跡）



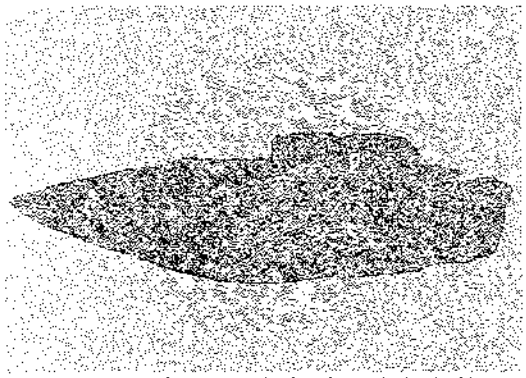
P－19・20　漆塗り弓（滋賀里遺跡、松原内湖遺跡）



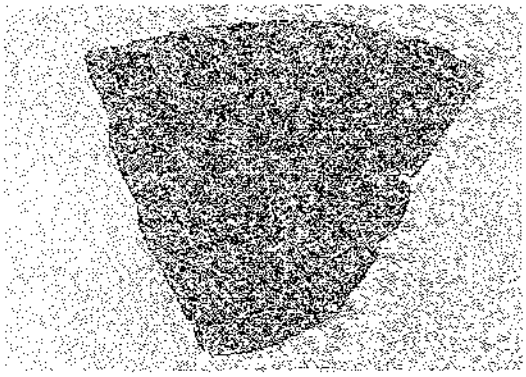
P－21・22　黒漆塗り短甲（松原内湖遺跡）、環頭形状木製品（斗西遺跡）



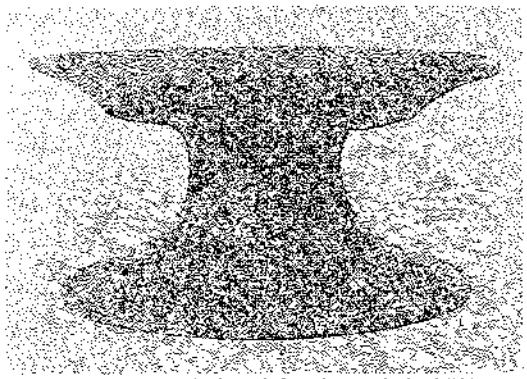
P－23　籃胎漆器（滋賀里遺跡）



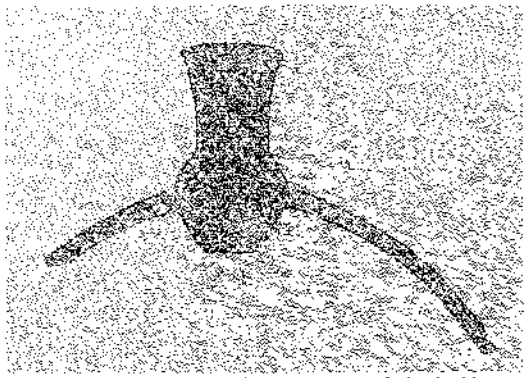
P－24　赤漆塗り浅鉢（松原内湖遺跡）



P－25　漆塗り大鉢（大中の湖南遺跡）



P－26　黒漆塗り高杯（入江内湖遺跡）



P－27　黒漆塗り蓋笠骨（松原内湖遺跡）

編集後記

本号には9編の論考を掲載することができた。第4号が協会設立20周年記念ということもあり、多くの論考が寄せられたため、本号には1篇の原稿も集まらないのではないかとの編集者の杞憂が一蹴されたことに安堵感と喜びを覚えた。これはひとえに職員各自の日々研鑽の賜ものであり、それぞれが発掘調査のみに忙殺されることなく小さな研究者としての責務を全うしたことの何よりの証しとして評価されるものであると考えられる。次号以降もより多くの方々からの投稿を期待する次第である。

編集者

平成4年3月

紀　要　第5号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775) 48 9780・9781

印　　刷　中西印刷株式会社
京都市上京区下立売通小川東入ル
Tel(075) 441-3155　Fax(075) 441-3159